

# 日蓮聖人における信と解について

伊 藤 寛 仁

## はじめに

日蓮聖人（以下聖人と略記）は法華経信仰の果報として成仏、或は靈山往詣を教示している。ここでは、果報に到るための「信」と「解」を聖人の遺文から考察してみたい。

聖人は単に果報を示すのみではなく、「道心堅固にして今度仏になり給へ」<sup>(1)</sup>と弟子檀越等に対して積極的に得果を説示し、成就することを目的・願望としていた。『四条金吾殿御返事』に「日蓮は少より今生のいのりなし。只仏にならんとをもう計也」と述べられるように聖人自身の法華経信仰を吐露しながら信徒の法華経信仰を確認しつつ激励と果を示し教道されたものである。

## 一

われわれが聖人の教えを学ぶ目的は、正しい領解によ

り成仏を期すことにある。そこで目的に達する得益の爲には、その方法と手段が重要な問題となろう。遺文に示された聖人の教えは、当時の対告衆を前提に説かれたものであって、われわれに直接与えられたものではないから、かならずしも一般的説示として示されるものではないという言い方もできようが、しかし、種々の遺文を検討することによってその間隙を補ない真意を理解することが可能であろうし、そこに現代の課題を解決するための対話があり得ることであろう。

聖人の教えの中で、得益のための方法、手段は近年教育学上の問題として関心が払われ主体的立場を明確にしつつ信行論として考究されている。

渡辺宝陽教授は「日蓮聖人の宗教における信行論を考察するときまず絶対信が先にあるのであって、行はその信に即しているものと考えられる」<sup>(2)</sup>と論じられ、行の前提として信が位置づけられている。即ち信心為本を

根幹として信心正因・受持正行がたてられている。

また、得道が一念三千の観法によるものであるか、妙法五字の受持唱題によるのかということも論じられている。そこでは信と解が教学上どのように解釈されるのが問題とされている(3)。

遺文には信徒に対し再三再四に互り信心が強調され、また他面、大師講や法門談義が開かれ解に關しても奨励されている。このことは、信心為本に立ちながら学解の追求がなされ両面的性格があったと思われる。そこで、信を強調している遺文を挙げてみると、

『守護国家論』 信<sup>スル</sup>法華經<sup>ニ</sup>之輩捨<sup>テ</sup>法華經之信<sup>ニ</sup>自<sup>リ</sup>隨<sup>ニ</sup>權人<sup>ニ</sup>外於<sup>ニ</sup>世間惡業<sup>ニ</sup>者不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>法華功德<sup>ニ</sup>故不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>墮<sup>ニ</sup>三惡道<sup>ニ</sup>也。(定遺二二八頁)

ここでは、法華經を信じる者は、惡知識の縁に依って法華經を捨てないかぎり、法華經の功德によって惡道に墮ちないということが示されている。

『唱法華題目鈔』 法華經を信じ侍るは、させる解はなけれども三惡道には墮<sup>レ</sup>べからず。(定遺一八八頁)  
ここでは、解はなくとも法華經を信ずる心があれば三惡道に墮ちないことが示されている。

『開目抄』 諸難ありとも疑<sup>ハ</sup>心なくは自然に仏界にい

たるべし。(定遺六〇四頁)

『波木井三郎殿御返事』 末代惡人等成仏不成<sup>ハ</sup>罪<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>輕重<sup>ニ</sup>。但此經可<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>信不信<sup>ニ</sup>。(定遺七四九頁)

これらに通じて見られる信の強調は、結局、不信謗法の罪によって惡道の苦を受ける末法の凡夫衆生を救済しようという慈悲心に他ならないものと考えられる。

しかし、信心だけで得道があるのであろうかという疑問(批判)に答えるという面も見られる。『法華題目鈔』には、

今の代の世間の學者の云、只信心計にて解心なく南無妙法蓮華經と唱る計にて争か惡趣をまぬがるべし等云云(4)。

とあり、これに答えて

させる解はなくとも南無妙法蓮華經と唱るならば惡道まぬがるべし(5)。

と論じている。解が無くても信があるならば得道があるから解は不用かというところではなく、

『持妙法華問答鈔』 上根上機は觀念觀法も然るべし、下根下機は信心肝要なり。(定遺二七九頁)

『十章鈔』 心に存すべき事は一念三千の觀法なり。

これは智者の行解なり。日本国の在家の者には但一

向に南無妙法蓮華經となへさすべし。(定遺四九

〇頁)

等の書では観念観法も教示している。

そして、『武蔵殿御消息』(定遺八七頁)・『富木殿御返事』(定遺一五頁)・『金吾殿御返事』(定遺四五八頁)・『上野殿母尼御前御書』(定遺四六〇頁)・『弁殿御消息』(定遺六四九頁)・『波木井三郎殿御返事』(定遺七四五頁)等では、「大師講」や「止観の談義」、「法門談義」が行なわれていたことが見えるから学解の方面についても積極的に奨励されていたことがうかがえるよう。また、『開目抄』の冒頭にも「習学すべき物三あり所謂儒・外・内これなり」(6)と明確に習学すべきものが述べられており、聖人は学解を不用なものとは考えていなかったものと思われる。

## 二

聖人は信と解を積極的を奨励し、法華經の果報に到らしめようという姿勢が伺われるのであるが、信と解においてウェイトの置き方が少し異なるように思われる。信は得道のためには必要不可欠なものとし、信の無い解は謗法であるとされる。

『顯謗法鈔』では「一信而不解 二解而不信 三亦信亦解 四非信非解」(7)と四種の信解の解釈がなされている。この中の「信而不解」は得道はあるけれども、「解而不信」は謗法の者とされる。本書の中で聖人は、『涅槃經』に説かれる「信而不解」は「涅槃經聞一切衆生悉有仏性之説雖信之而不信者也」(8)、「信而不信」、「信不具足」と述べられ、その中の不信は「心を爾前之經に寄する」ことを指している。これは『守護國家論』の日本辺土末學誤多実少者歟。随而學其教二人数多レ自龍麟一得道者希自三麟角一。或依三權教二故或依三時機不相応教二故 或不レ弁三凡聖教一故或不レ弁三權実二教二故 或依三權教謂三実教二故 或不レ知三位高下二故。凡夫習就三仏法二増三生死業二其縁非レ一。(定遺八九頁)と述べられる如く仏法を習い損ねる者を指すものであるう。

また『法華題目鈔』においても信と解について述べられ信が強調される。

仏道に入る根本は信をもて本となす。(略)たとひさとりあれども信心なき者は誹謗闡提の者也。(定遺三九二頁)

前の文は須梨槃特や迦葉・舎利弗等であり「無解有信」

の者とされ、後の文は善星比丘や提婆達多等であると示されている。

このように法華經の得道のためには「信」が「以信得入」と強調されるのであるが、しかし、『觀心本尊抄』には、法師品の「難信難解」、宝塔品の「六難九易」等の經文を出し、更に先師の釈を挙げてゐる。

天台大師云、二門悉<sup>レ</sup>与<sup>レ</sup>昔反難信難解。章安大師云、仏將<sup>チ</sup>此爲<sup>ス</sup>二大事<sup>、</sup>何可<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>易<sup>キ</sup>解也<sup>、</sup>等云云。伝教大師云、此法華經最爲難信難解。随自意故等云云。(定遺七〇五頁)

これは、「教門の難信難解」と「觀門の難信難解」の天台の釈から述べられたもので⑨、「超<sup>セン</sup>過<sup>ゴ</sup>已<sup>ル</sup>今<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>隨自意難信難解」と法華經信仰の困難さを提示している。これは『守護国家論』の「万<sup>マン</sup>一<sup>イツ</sup>信<sup>シン</sup>法華經<sup>ハツパフキョウ</sup>者<sup>シャ</sup>」⑩という表現からも伺がえ、難信難解であるが故に末代の凡夫は惡道に墮ち易いのであるから、苦をまさけに受けようとしている衆生を救済しようという聖人の教示であると考えられる。

『三三藏祈雨事』には「されば仏になるみちは善知識にはすぎず。わが智慧なにかせん。ただあつきつめたきはかりの智慧だにも候ならば、善知識たいせちなり。

而に善知識に値<sup>ニ</sup>事<sup>ノ</sup>が第一のかたきことなり」(定遺一〇六五頁)と、得道のためには善知識によらねばならないとしている。逆に、『光日房御書』には「禪師・律師・念仏者・真言師を善知識とたのみて」⑪、『千日尼御前御返事』には「大怨敵たる念仏者・禪・律・真言師を善知識とあやまてり」⑫と述べられるように善知識を誤って依りどころすると惡道に墮ちるとされる。法華經の得道のためには信と解が必要とされるのであるが、その信と解も「真実の善知識」⑬によらねば誤まるものであるから信と解は善知識に依存しているといえよう。

## おわりに

聖人が「信」と「解」の両者を奨励していたということとは「有解有信」、『顯謗法鈔』の表現でいえば「亦信亦解」の状態を理想として見ていたと考えられる。それは「法華經の行者」、或は「如說修行者」ということになる。即ち信解が行という実践、菩薩行という動的な活動展開を必要としていたと思われる。『南条兵衛七郎殿御書』において、

信心ふかき者も法華經のかたきをばせめず。(略)

一念三千の觀道を得たる人なりとも法華經のかたき

をだにもせめざれば得道ありがたし。(定遺三二二頁)

と述べられ、信と解があっても謗法の者を折伏しない限り得道は無いとされる。このように「信」から「行」へと展開していく聖人の教示は、法華經の信解というものが必然的に行を要請しているものといえよう。

以上の小稿では、聖人は信と解の両者を奨励され、特に信は得道のためには必要不可欠であり、又、信と解は善知識に依存し行を要請する教示が確認できた。

註

- (1) 『四条金吾殿御返事』(昭和定本日蓮聖人遺文一五九四頁) 以下(定遺一頁と略記する)
- (2) 『日蓮宗信行論の研究』(一六頁)
- (3) 『大崎学報』所収「日蓮聖人の教観二門に関する一試論」(第一三三号)、『同』所収「日蓮教学と基礎教理論について」(第一三五号)等参照。
- (4) (定遺三九三頁)
- (5) (同右)
- (6) (定遺五三五頁)
- (7) (定遺二七二頁)
- (8) (同右)

- (9) (定遺七〇三頁)
- (10) (定遺一三三頁)
- (11) (定遺二六〇頁)
- (12) (定遺一五四四頁)
- (13) (定遺一二三頁)